

「底が突き抜けた」時代の歩き方 312

子供を見ているだけでは「子供」はわからない -

兵庫県公教育界の混乱？

《兵庫県の公立小中学校の現場で、勤務時間中に学年忘年会を開催したり親睦旅行に参加したりするなどの不適切な勤務実態があることが30日、会計検査院による指摘で明らかになった。教職員組合開催の集会への勤務時間中の参加までフリーパスだったケースもあり、文部科学省は全県的な実態解明と是正に乗り出した。》と冒頭に綴った記事が、02.5.31付産経新聞に掲載された。記事では、勤務時間中の組合活動の実態などを調べるため、会計検査院が今年の4月頃、宝塚市や川西市など阪神間を中心に調査を実施したとして、次のように記されている。

《兵庫県には、教職員が超過勤務をした場合、別の日の勤務時間を削って休みにあてることのできる「割り振り」と呼ばれる制度がある。忘年会や親睦旅行について、宝塚市教委は「割り振りの手続を忘れたためのミスで本来は勤務時間中ではなかった」と弁明している。

この「割り振り」の適用となるのは学校行事や職員会議などで超過勤務が行われた場合に限定されている。しかし、宝塚市の小中学校、川西市の中学校では報告書や資料の作成、校内研修会の実施などといった場合にまで範囲を広げて適用している例がみられた。

また宝塚市では、教職員組合が主催する県教育研究集会への参加に当たって、「研修として有益」などの理由で、組合役員の教職員については年休を取らずに参加できる「職務専念義務免除」扱いにしていたことも判明した。》

おそらく兵庫県のみならず、公立学校に勤務している（た）教職員なら誰でも見知っていることが、改めて全国紙に大きく掲載されたにすぎない。雑誌『正論』平成14年7月号でも、この問題が何人かの「学校関係者の証言」を交えながら詳しく取り上げている。産経新聞や『正論』が公立学校教職員の勤務問題に焦点を当てる意図ははっきりしている。公教育を遂行すべき学校現場が教職員組合に支配されて、公教育が歪められているということだ。そこから「公教育の正常化」という主張が大きく掲げられてくるのだと思われる。しかし、なぜ産経新聞のみが突出して熱心で、他の朝日や毎日、読売などはそれほど熱心ではないのだろうかという疑問が当然湧き起こるが、それはまた別の問題になるので、ここではその方面に踏み入らない。

全国の公教育が組合活動によって損なわれているとみえるなら、産経新聞や公教育の未来を憂える人々にとっては、現在の学校現場の実状は耐えられない筈だ。《日本教職員組合（日教組）をはじめとする教職員組合の勢力が強く、学校現場を組合が実効支配したり、教育委員会や学校管理職が組合側と馴れ合ったりしてきた一部地域では、長年、

こうした原則を無視して勤務時間内に組合活動に従事することを容認する風潮が続いてきた。》として、『正論』は北海道や広島県、三重県、東京都国立市での勤務時間中の組合活動の判明と、不正勤務時間分の給与返還をめぐる動きを取り上げ、兵庫県でも同様の問題が会計検査院の調査で浮かび上がってきたということだ。《県教委が、校長権限を束縛するような通知を出し、市町教委が確認書を教職員組合と締結していた兵庫県の公教育。文部科学省の是正指導が入り、今年３月には県教育長が問題の通知の無効を宣言して学校管理運営規則も改正した。これを受け、市町教委レベルでも是正が進んで...とっていたら》(『正論』)、全然そうではなかったと指摘しているのである。

いうまでもなく一つの組織集団は必ずその中でのみ通用する論理と方便を生みだし、慣行という名のルールをもつ。それは良し悪しの問題ではなく、組織集団をつくりだすことによって世界を内と外に分けてしまうことからやってくる必然である。本来どのような組織も何かを行うためのプロジェクトとして設立されるであろうのに、一度設立されると、組織は何かを行うための組織であるよりも、自らを存続維持させるための組織に変わってしまう。あくまでも何かを行うところに主眼が置かれ、そのための組織であった筈なのに、その組織が強固に存続されなければ何かを行うこともできなくなると考えることによって、何かを行うことよりも組織の存続それ自体が組織にとっての第一義的な目標になってしまうのだ。日本国民のための外務省であるよりも、外務省職員のためのものになってしまう外務省をみればよくわかる。

外務省職員のための外務省であるなら、彼らに有利な方便と理屈がさまざまなかたちをとって内輪で作られていくのは当然である。組織が何かを作ったり、何かをするための組織でなくなり、放っておけば外務省のように、その組織の構成員のための組織に必ずなってしまう。民間会社では、雪印がそのお手本を見せてくれている。`社員`の社員による社員のための会社`になってしまっていたから、その体質が不祥事と共に明るみに出たとき、ないがしろにされた消費者から袖にされて、子会社の倒産 - 会社規模の縮小という大きなダメージを蒙ることになったのだ。自分たちが作った商品を買ってくれる消費者がいなければ、会社が成り立たないことはあまりにも当たり前ののに、消費者のための会社であることを忘れてしまったのだ。そこに致命的に欠けているのは、消費者のまなざしであり、会社の外のまなざしである。

もちろん、会社だって消費者は神様であるとか、一人の消費者のためにとか、消費者の立場にたって、というようなスローガンを社是にして掲げているだろうが、スローガンを掲げていることと、消費者（外部）のまなざしをたえず繰り込みながら会社を運営し、製造 - 販売のプロセスに携わることは全く関係がない。スローガンなどなくても、（会社という）組織の存立要因は組織の内ではなく、組織の外にあることが明確であるような形態がたえず創造されつつあるかどうかなのだ。いいかえると、組織の内ではしか通用しないような体質に閉じこもっている限り、つまり、外の世界のまなざしに耐えられないような発想や論理を流通させている限り、立ち枯れはみえている。

学校（教育界）にも同じことがいえる。ただ民間会社であれば、消費者のまなざしを持たない会社は消費者離れを惹き起こすことによって、会社の存亡の危機に直面せざる

をえなくなるが、公教育界は外務省がそうであるように、そのような危機に直面することはない。だから学校現場はますます自らの力で変えていこうとしなくなる。産経新聞などのメディアは「公教育の正常化」や「違法な組合活動」を前面に押しだしながら文部科学省や、県、市に是正を迫り、世論を喚起しようと努めるけれども、学校問題の本質はそこにはない。大半の日本人がそうであるように、学校の中から外へ、より外へと視線をどんどん引き伸ばしていく視力を培う努力をせずに、自分の小さな周辺でのみ頭を働かせ動き回る体質にどっぷりと身を浸し、一体、肝心なことは何かということを考えなくなってしまっているところにある筈だ。学校問題は日本人問題に重なっているけれども、より濃密な日本人問題として浮上しているところに、学校問題の深刻さがあるにちがいない。

なるほど、さまざまな既得権の上に乗っかって従前からの勤務のありかたを固守し続けようとする学校現場は、高度経済成長期を支え、バブル時代を押し上げてきた日本の手法が、バブルの後遺症に長く苦しむ日本経済の下降局面の中で根本的な見直しを迫られ、変革を急ピッチで求められているという世界の中の日本の動きなど全く眼中にない。学校現場が組合に実効支配されているかどうか以前に、日本の多くの企業や組織が効率的な風通しのよい仕組みをつくりだして、必死にあらゆる分野での停滞を打破し乗り切ろうとしているし、またそうしなければ生き残れないという危機感を募らせているのに、学校の外で吹き荒れているそんな空気を読み取るどころか、その空気から自らを遮断するように学校の中だけを流れている居心地のよい、馴染んだ空気に浸りつづけようとする。もちろん組合もまた、学校現場の自己変革性を促す触媒の役割を果たす気など毛頭ない。

作家の橋本治が、『婦人公論』(01・10・7)で去年の8月末に日本の完全失業率が5%になり、失業者が330万人になったことを、敗戦直後の「ふりだし」に日本が戻ったと思うだけだを書いて、こう続けている。

《戦争中の軍国主義に翻弄された日本人は、戦争が終わった時、「またあんなことにならないためにはどうしたらいいのか」を考えなかった。それより先、「どうやって食って行くか」を考えた。それは当たり前のことだが、しかし、その後の「なんとかやって行ける」という段階になった時でも、「またあんなことにならないためにはどうしたらいいのか? 生きて行くとはどういうことなのか?」を考えなかった。「そこそこ食べる」になったら、「もっと豊かに、贅沢に」を選択して、それっきりだった。そこから「経済戦争」というものが始まり、日本は、「最初の段階では勝つが、最後には負ける」という太平洋戦争の状態を繰り返す。「バブル経済」へ向かうしかなくて、それが「はじけた」になるのは、新手の軍国体制とその破綻をあらわすものなのだ。一度そうなって、しかし日本人は、「そうならないために」の根本を考えなかったから、同じことを違うパターンで繰り返す。》

そう、根本を考えずに、「同じことを違うパターンで繰り返」した挙げ句、「二度目の敗戦」を喰らわされて、まだ「帳簿の中」だけだから目には見えてこないけれども、もう直に日本人には目に見える「廃墟」の中に両足を突っ込んでいる自分自身を見出すよ

うになるということだ。だが、問題はそのことにあるのではない。「廃墟」の中に両足を突っ込む一人一人の日本人自身が「廃墟」そのものと化しつつあることが、本当の「廃墟」なのである。「20人に一人が失業者」という事態は、「日本人はみんな企業に就職する」という、これまでの日本的な方式が立ち行かなくなったことを物語っており、その破綻の中に橋本治は、ごまかしつづけている「帳簿の中の廃墟」が姿を現しつつあるのを感じ取っているのだ。

《日本人は、「学校へ行き、就職をする」を当たり前にして、会社と学校を似たようなものにしてしまった。仕事というものが、「自分を成り立たせるために自分でするもの」ではなくって、「会社が仕事を与えてくれる」や、「会社の拘束時間を`仕事`と呼ぶ」に慣れてしまった。だから、「自分を成り立たせる仕事を自分で作り出す」が出来ない。》

橋本治がこう書いている「仕事」を「勉強」に置き換えると、学校にもそっくり当てはまる。勉強というものが、「自分を成り立たせるために自分でするもの」ではなくって、学校が勉強を与えてくれることや、勉強をしてもしなくても学校の拘束時間を`勉強`と呼ぶことに慣れてしまった。だから、学校で教えるほうも教えられるほうも、**自分を成り立たせる勉強を自分で作り出すことが出来ない。**

《もう「企業の時代」は終わって、仕事は、「会社が与えてくれるもの」ではなくなった。》と彼が続けていることに倣っていえば、もう「学校の時代」は終わって、勉強は学校が与えてくれるものではなくなったということになるだろう。少なくとも「20人に一人が失業者」という事態が、「学校へ行き、就職をする」といったこれまでの当たり前に風穴を開けたと捉えるなら、学校のその先に就職があるような学校であることや、そんな学校が与えてくれる勉強が根本から問い直されていることになる。

今の日本は「ふりだしに戻った」のだから、「考えるべきことを考えろ」と橋本治はいうが、「考えるべきことを考えてこなかった」から「またふりだしに戻った」のであって、これから「考えるべき事を考えない」同じ繰り返しを行っていくのではないだろうか。だいいち、大半の日本人は「ふりだしに戻った」などとは夢にも思っていないだろう。だから、「考えるべきことを考えろ」にはけっしてならない。学校現場における不適切な勤務実態の会計検査院による指摘や、それをめぐる各市、県教委の対応、マスコミ報道といった一連の事象には、「20人に一人が失業者」の「事態を考える中で問題を剔出ししようと**姿勢も視線も全くみられない**。つまり、「考えるべきことを考えてこなかった」日本が行き着くようにして踏み入りつつある「廃墟」を見据えながら、勤務実態をも含んだ学校問題を改めて考えていこうとする機運は学校現場の内からも、その学校に注ぐ外の視線からも微塵も伝わってこない。

そのことを端的にあらわしている光景が、『正論』に次のように記述されている。

《兵庫県教職員組合（兵教組）や兵教組宝塚支部が作成した保護者あてのピラが、学校現場で子供たちに配布されていたのだ。

兵教組のピラが配られたのは、昨年12月初旬だった。ピラは『保護者・県民のみなさんへ』と題され、「県当局・県教委は（中略）教育予算や人件費の削減を進めようとしています」「県当局・県教委が、教育条件を悪化させ、教職員の働く意欲を削ぐよう

な回答しかしない場合には、わたしたちは、１２月４日の早朝２時間ストライキをせざるを得ません」「ご理解とご支援をお願いします」などと書かれている。ストライキの予告ビラである。（中略）

一方、兵教組宝塚支部のビラは、今年２月７日に開かれた同支部の教研集会の案内だった。

市教委によると、この二種類のビラが校内で子供たちに渡されたのは、市立小・中・養護の全３７校のうちいずれも３５校。「終わりの会」などの場で、担任らが子供に渡したという。「終わりの会」は勤務時間中であるため、組合ビラ配布という組合活動を行ったことで職務専念義務に違反する可能性もある。》

問題は職務専念義務違反であるとか、「ストライキという違法行為の案内」を教え子に渡すという次元をはるかに突き抜けている。スト予告ビラにしても教研发内ビラにしても、教職員たちの側の事情ばかりが盛り込まれているだけであって、そこには自分たちのスト決行や教研集会の開催は、子供たちがどのように学びとっていく問いになりえているかという観点がスッポリと抜け落ちているところに問題は集中しており、そこが他の民間企業と単純に比較できない点である。「県当局・県教委が、教育条件を悪化させ、教職員の働く意欲を削ぐような回答」をするなら、ストを行うという言い分の中には、全く「子供」は含まれていない。それどころか、「教育予算や人件費の削減」はすべて県当局・県教委の責任にすることはできず、日本経済の沈滞に大きく困っているから、それによって「教職員の働く意欲を削」ぎ、子供たちに跳ね返っていくというような直線的な論法はほとんど脅しでしかない。

もっともそれはいつものポーズであって、その証拠にストなどもう何年もやっていないから、真正面から反応しても仕方がないと思わないでもない。しかし、単に日付けを変えたようなビラを毎年同時期に配布しつづける組合や、なんの疑問もなくそれを手にしつづける教職員の精神構造や体質は、日本や世界がいまどのような困難な課題に直面しており、そしてその困難な課題は複雑な経路を辿って、日本の「学校」問題としても射し込んできていることに頭を巡らすことのできない能天気振りを露呈している。違法云々よりも、世界や日本が従来 of 枠組みから脱して変革を求めていかなばならなくなりつつある動きにリンクしようとする一瞥すら宿さず、従来 of 枠組みの中での無関心に浸っていることこそが、更に「子供」の不在が膨大に広がっていることに気づかなくなっていることこそが、肝心なことではないのか。

組合ビラにとって子供は保護者への運搬役でしかない。ストライキや教研集会は子供たちに最大にかかわる教職員の活動であるにもかかわらず、そこでは子供たちは大人に無関係な「子供」として全く除外されてしまっている。教研集会とは本来的には「考えるべきことを考える」場である筈なのに、「子供」からのまなざしを遮断していることによって、「考えるべきことを考えない」場にしてしまっているといわざるをえない。もちろん、教研集会は単にスケジュール的に消化されていく組合行事ではなく、普段は忙しい筈の教職員たちが一堂に会して白熱した議論を交わし合う場なのであろうが、問題は議論が白熱しているかどうかにあるのではなく、その白熱した議論のどこに「子

供」のまなざしが入り込んでいるのかという点であろう。

たぶん教員たちが「子供」のまなざしをほとんど気にしないのは、子供たちは大人になる手前の段階と考えているからだ。この考えに立つなら、子供はやがて大人になるべき未熟な存在ということになる。確かにどの子供も年を取って社会に出て行くようになれば、私たちがそうであるように否が応でも大人になっていくだろう。だからといって、「子供」は大人になる前の未熟な存在であるわけではない。未熟さでいうなら、未熟な子供もいれば、未熟な大人もいる。「子供」とは人間にとっての存在様式における一つの世界にほかならない。男と女が共存しているように、大人と子供も共存しているのであって、子供を大人になるための階梯としての存在とみなしたとき、「子供」は見えなくなってしまう。子供は大人になろうとしているのでない。「子供」になろうとしているのである。大人が「大人」になろうとするように、だ。

大人としての立場で「子供」の世界をみなくなっていく以外に、普段から多くの子供に取り囲まれ、子供との接触が職業になっていることが、「子供」の世界から教員を更に遠ざける大きな要因になっていると考えられる。つまり、子供に近づかなくても、子供はたえず目の前にいることで、子供を見馴れてしまっている。途切れることなく目の前に子供が群がっていることによってもたらされる疲労は、教員をますます一人一人の子供の中に「子供」の世界を訪ね歩く作業を見えなくしてしまうだろう。しかし、子供を見ているだけでは「子供」はわからない。文学をみているだけでは「文学」はわからないのと同様である。人間をみているだけでは「人間」がわからないから、猿や他の動物にとどまらず、オサムシのような小さな虫にまで目を止め、これだけさまざまな生きものが地球上にいることに驚き、その内の一つの生きものである「人間」の営みに驚くのではないのか。

教員がみているのはたくさんの子供であり、一人一人の子供であるかもしれないが、一人一人の子供の中にある「子供」という人間の世界ではないような気がする。「子供」という人間の世界はもちろん、「大人」という人間の世界とはまるで異なる。だから、「大人」の縮小版として「子供」を位置づけることはできない。「子供」の世界と「大人」の世界を地続きで捉えたら、必ず失敗する。大きな断層が横たわっているからこそ、その断層を前にして跨ぎ越さずに、さまざまに迂回しながら、複数のものを組み合わせて考えることが必要となってくるのである。文学以外の世界が見えなくなったとき、「文学」も見えなくなってしまう。したがって、「子供」の世界を知るためには、子供以外のさまざまな場所で「子供」を見つけだす作業を繰り返さなくてはならない。

一人一人の教員にとって、年中行事になっている賃金・予算確保闘争や教研集会は、自分たちの知らない「子供」の世界を探しに赴く旅なのであろうか。自分はこのような視線で「子供」の世界を訪ね歩くという、一人一人の「見方」の驚きがそこにあふれ返っているようなものなのだろうか。もしそうでないとするなら、教員に求められているのは慣性的な研修のありかたではなく、学校や教育職や自分自身のこれまでの枠組みから大きく逸脱していく本当の「研修」活動ではないのか。 2002年6月29日記